

日本語の言いさし文の談話機能：「共話」「対話」 という観点からみた日中対照研究

葉, 郁禮

<https://doi.org/10.15017/2534369>

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

要旨

「言いさし」や「中途終了型発話」に関する先行研究は文法研究、話者の使用調査、テキスト分析など、さまざまな角度から数多く行われてきている(白川 2009 ; 陳 2000 ; 高田・福盛 2001 など)。しかし、それらの研究のほとんどが接続助詞を中心とした文法研究や教科書における言いさし文の提示頻度を中心とするものであり、実際の会話における言いさし文の用法に関する談話分析的な分析はまだ少ない。また、中国語を母語とする日本語学習者は母語話者が使っている言いさし文に不慣れなため正しく理解することができず、誤解を招く場合も多い。実際の会話における日本語母語話者の言いさし文の使用意図などの解明を行い、その結果を日本語教育への還元することが期待されている。本論文では、日中両言語の母語話者の自然会話を分析資料とし、「共話」と「対話」の観点から両言語の言いさし文が会話中でどのような役割を果たし、また会話の進行にどんな影響を与えるかの解明を試みる。

本論文は 6 章から構成される。

第 1 章から第 3 章では本論文の目的、先行研究及び分析データについて述べる。

第 4 章は日本語の言いさし文に関する分析である。まず、発話を実質的発話と相槌的発話の二種類に分け、実質的発話のみを分析対象とし、完全文と言いさし文の割合を調べた。その結果、言いさし文が会話全体の約三分の一を占めていた。また、文末終了形式を「名詞終了」、「副詞終了」、「助詞終了」、「て形終了」、「その他」の五種類に分け、使用傾向を調べた結果、「助詞終了」、「名詞終了」、「その他」の合計は全体の九割近くであることが明らかになった。さらに、「助詞終了」を「接続助詞終了」、「副助詞終了」、「格助詞終了」に細分化し、出現する頻度を調べた結果、多くの先行研究で指摘されている通り、接続助詞の使用頻度が最も高かった。また、品詞の枠を超え、文末に多く観察されている「たり」、「かも」、「みたいな」などのぼかし表現の用法を再整理し、その使用傾向についても調査した。その結果「みたいな」の使用が全体の半数以上となり、かなり偏っている傾向がみられた。それについては、国語世論調査でも、若者における「みたいな」の使用が例年増加する現状が報告されていた。したがって、本論文で取り扱ったデータにおいて「みたいな」の多用が観察されたのは一種データの属性の反映だと考えられる。また、文末におけるぼかし表現の男女差については、具体的な事例としては、女性は男性より二つ以上の文末におけるぼかし表現を併用することによって、それらの機能をより強くする傾向が観察された。最後に、実際の会話例の分析を通して、水谷信子(1980)が提案した「共話」に基づき、話者間の親疎関係について分析を行った。

その結果、言いさし文は、疎である人間関係では、上位者が言いさし文を使って話題をリードする傾向があるのに対して、親である人間関係では、共通経験などを通して積極的に話題へ参与することで、話者間の連帯感を形成させ、会話を促進させるのに貢献していた。

第5章では、中国語の日常雑談会話を使って、言いさし文の機能について分析し、第4章の日本語の分析結果と対照させた。まず、雑談会話における日中両言語の言いさし文の使用率については、日本語が37%であったのに対して、中国語はわずか8%であった。換言すれば、中国語の雑談会話は、ほとんど完全文で構成されているといえる。次に、両言語の言いさし類型の出現率に関して比較してみると、日本語では助詞終了が最も多いのに対して、中国語では述語欠落が最も多く観察された。さらに、言いさし文の機能を「情報要求」、「情報伝達」、「情報応答・情報提供」、「その他」の四つに分け、日中両言語の言いさし文四機能の使用割合を調査した。その結果、日常雑談場面では、言いさし文は日中両言語とも「情報伝達」に最も多い傾向が見られたが、文末品詞と機能の対応関係に関しては、日本語においては助詞終了の使用が最も多かったのに対して、中国語では述語欠落が最も多く観察された。次に、共話の観点からみた日中言いさし文の使用については、日本語の共話の構成は、言いさし文が2文連続から7文連続までの例が見つかったが、中国語は2文連続が四例と4文連続が一例の結果であった。さらに詳細に見てみると、中国語の共話では、最後に必ず文が完成されるのに対して、日本語では言いさし文で文を未完了のまままで終える例もいくつか観察された。したがって、中国語の会話では、やはり対話の傾向が強いことが明らかになった。また、日本語の言いさし文の使用には上下関係が関わるが、中国語にはそのような現象が見られなかった。

第6章では、5章までの内容をまとめた上で、今後の課題について述べた。

言いさし文については数多くの研究が行われているが、日中対照研究は多くは見られない。また、従来の日中対照研究はドラマや映画のシナリオを分析資料とするものも多く、談話分析に基づき日本語の中国語の言いさし文を対照させたものは数少ない。さらに、共話・対話の観点から行った日中言いさし文に関する対照研究は管見の限りでは存在しない。本研究の成果は、日中対照研究に大きく貢献しうるものと期待できる。